

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

\*\*\*\*\*  
本レポートは、公益社団法人企業メセナ協議会主催によるミニ・メセナフォーラム「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」の全文をまとめたものです。  
\*\*\*\*\*

## 1. NPO 法人プラス・アーツの取り組み

### 大澤

きょうはお忙しいところ、また足元の悪いなかお集まりいただきましてありがとうございます。

ミニ・メセナフォーラム「災害とアート」という大きなテーマで約1時間お付き合いください。

永田宏和さんはNPO 法人プラス・アーツの理事長でいらっしゃいます。皆さんのなかで、テレビ番組「情熱大陸」をご覧になった方はいますでしょうか。僕が永田さんと知り合ったのは4～5年前で、当時も既にすごく忙しくしておられました。最近ではテレビ・雑誌でも取り上げられて、海外でも相当活躍されています。

テーマが「災害とアート」ということで、阪神・淡路大震災の体験から生まれた自身のご活動の振り返りになりますが、よろしくをお願いします。

### 永田

皆さん、こんにちは。

私自身は建築畑の出身で、ゼネコンで8年間、都市計画やまちづくりの仕事をやってから独立しました。

NPO の仕事をやっていますが、2012 年から KIITO/デザイン・クリエイティブセンター神戸というところで副センター長の仕事もしています。

きょうは「災害とアート」というテーマですが、じつは、アートをやっているかと言われると、厳密にはそうではないかもしれません。たとえば KIITO では、神戸市が抱える社会課題をクリエイティブの力で解決しようという「プラス・クリエイティブ・センター」というテーマを掲げ、子育て支援、環境、観光などいろいろなジャンルの取り組みを行っています。もちろんアーティストともコラボしますが、デザイナーや建築家、若い人たちの新しい発想みたいなものも取り入れて、それぞれの課題を解決しようということが活動のベースにあります。そのなかで「プラス・アーツ」という言葉も生まれています。

NPO プラス・アーツでは、楽しく学ぶ防災訓練プログラム「イザ！カエルキャラバン！」のほか、防災とスポーツを掛け合わせたり、『地震イツモノート』という本や絵本も出版したりもしています。そのほかにも東京を中心に企業のCSR や社員の防災教育も行っています。アート・ディレクターの寄藤文平さんをお願いして、キャラクターと中身のマニュアルは同じですが、色だけ企業のコーポレートカラーに変えた形でアレンジしています。また、マンションのコンサルティングも2011年以降かなりやっています。防災ミュージアムの監修は国内・海外含め最近増えてきています。NHKの「そなえる防災」の防災ドリルというところに、自宅避難のさまざまな知識をまとめています。スマートフォン対応もしているので、ぜひ1回やってみてください。

## 2. 楽しく学ぶ防災訓練、カエル・キャラバン

### 永田

震災とのかかわりでいうと、1995年の阪神・淡路大震災から10年経った2005年に、神戸の子どもたちや地域の人たちに向けて災害の記憶が風化しつつあるので伝えてほしいという依頼が神戸市からきたのがきっかけで、カエ

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

ル・キャラバンという取り組みが生まれました。これは一言でいうと楽しい防災訓練プログラムという言葉につけるといいます。

カエル・キャラバンができるにあたってアーティストの藤浩志さんとの協働は非常に大きかったと思います。彼がもともやっていた使わなくなったおもちゃの交換プログラム「かえっこバザール」というアートプロジェクトがありました。ただ防災の体験プログラムを並べても人が来ないことはそもそもわかっていたので、これと防災プログラムを組み合わせたんです。

カエル・キャラバンでは、要らないおもちゃを持ってきてポイントに替えて、また訓練に参加したらポイントが貯まって、オークションに参加するという仕掛けですが、これが広がりました。2014年度までの集計で、23都道府県で約250回開催しました。1年目はかなり手厚く支援をして、座学も実技指導もします。少なくとも2年目ぐらいまでは支援をして、あとは自分たちでやってもらう形で広がっていき、多くの地域がいまは自分たちでやっています。東京だと墨田区寺島の地域などは、もう7年目です。そのほかにも児童館や地域、被災地でやっていたり学校で授業の一環で実施してくれたり、いろいろな形で活用されています。

2011年以降、カエル・キャラバンは防災をテーマにしたほとんど祭りのようなものになっています。まさに祭りのようにいろいろな団体が防災訓練に協力して一緒にやっているので実行委員会形式のものが多いです。

海外でも広がっていて、JICAや国際交流基金の支援によりこれまでに16か国で実施しています。

2011年以降は、東日本震災での津波の経験から、生きる力そのものを育てないと災害には対処できないという実感もあり、レッドベア・サバイバルキャンプというプログラムをつくりました。「レッドベア」という赤い熊がキャラクターです。これは神戸の消防局の有志の方々とつくったプログラムですが、ブランディングは先述の寄藤文平さんをお願いしました。この取り組みは国内の各地域のほか、タイやチリでも広がっています。

サバイバルキャンプでは、「技バッジ」というのをつくって、ロープワークができるようになったらロープワークのバッジがもらえるという仕組みだけなのですが、バッジ欲しさに子どもたちが一所懸命やるわけです。おもしろいのは、バッジがどんどんローカライズされて、ご当地バッジというのが生まれています。いわきの人がプログラムをつくれればいわきバッジ。タイの人が洪水のプログラムをつくれれば、洪水対策の知識や技を学ぶタイバッジが生まれて、どんどん広がっています。

## 3. リサーチしてカタチにして変化する～成長するカエル・キャラバン

### 永田

カエル・キャラバンは楽しく、かつ、しっかり学ぶことが重要なので、さんざんリサーチをして集めた被災者から教えてもらった被災地で役に立つ知識や技がベースとなっています。当時、被災者にヒアリング調査した結果を本にもまとめました。この本では、被災者の声にすべて絵をつけてわかるやすく表現しています。ジャッキが人を助けるのに役立つとか、担架など無いときに畳や雨戸で運んだりするとよいとか、そのまま子どもたちに教えていきます。情報は誰が集めても一緒ですが、それらを子どもたちによりしっかり伝えるためにひと工夫、ふた工夫していろいろなアイデアを注入しました。藤さんのかえっこバザールと組み合わせることが途中から決まったので、藤さんのかえっこバザールのカエルのキャラクターを使って、全部のプログラムにカエルが登場するようにしました。

大事にしているのは被災者の声を集めて、それをベースにプログラムをつくっていくということです。ヒアリングやアンケートはいまでも大事だと思っていますが、防災や災害について本当に重要なことを一番よく知っているのは被災者だと思っています。海外でも支援を行っていますが、過去の災害に関する記録がほとんど残っていないので、記録を残すところから手伝っています。

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

カエル・キャラバンでは楽しさを演出するためにいろいろなアーティストや学生のアイデアを注入して常に進化を続けています。プログラムもどんどん新しいものができていくし、昔つくったものも改良されたりしています。

消火器的なプログラムがあるのですが、消火器的ないろいろなアレンジ版が出ています。じつはこの辺は藤さんの奥さんに制作をお願いしていて、福岡で地域の女性のみなさんが集まってつくってくれています。

的当てゲーム的は、アーティスト・ユニットの KOSUGE1-16 さんが一緒に活動していた東京・墨田区の町工場の吉成さんが改良の手伝いをしてれています。どんどん軽くなったり、錆びにくくなったり、いろいろな工夫がされて町工場の技術の粋が集まっているといった感じです。

カエル・キャラバンで使うのは紙食器など、全部被災者が「こういうことが必要になるよ」といったことをプログラムにしています。教材などは誰かがすでにつくってくれていたらそれを買って使うのですが、なかったので自分たちでつくりました。家具転倒防止を学ばせるミニチュア教材はわれわれが結果的にメーカーになりました。これまでに国の防災ミュージアムや行政、企業などが買ってくれています。

## 4. 遊びを通して学ぶ

### 永田

ゲームや教材も得意分野です。被災者の声を集め、それを子どもたちに伝えるために、紙芝居やカードゲーム、漫画の教材にしています。

ゲームをつくるのは、1年から1年半かかります。ゼロの状態からつくりますが、慶応大学商学部の吉川先生というゲーム学の權威の先生に監修してもらって、一緒につくっていくケースが多いです。

たとえば、ある漫画教材では、主人公のセリフの一部をブランクにしています。その部分のセリフを子どもたちに考えさせるということですね。英語、スペイン語、トルコ語、タイ語に翻訳されて、各国で使われ始めています。

僕らがつくっているのは全部インタラクティブなものです。正しいことだけ教えても絶対頭に残らない。考えさせて、子どもがいろいろなことを言うのも全部評価してあげたほうがよいと思っています。

## 5. 日本文化としての防災教育と文化のローカライズ

### 永田

文化というテーマとも絡みますが、防災教育は日本の文化だとずっと言い続けてきました。

どの国にも、そんなに充実した防災教育というのはいないです。

日本でつくったプログラムを持って他の国に行くと、防災教育の内容は必然的にローカライズしていくのですが、ローカライズは非常に面白いというか、本質的だと思います。もともと地域にはいろいろな才能を持った人がいる、ということが藤さんの考え方の根底にありますが、そのとおりになっています。

最初に支援した地域で、2年目、3年目と継続開催になると、こちらは使用するツールに関してレンタル費を取るの、予算のない国や地域は自分たちでツールをつくりはじめます。そうすると親戚のカエル人形が生まれたり、量産体制が生まれたりします。いろいろな親戚のカエルがいて、そのうち逆輸入することもあるかもしれません。

たとえば日本は毛布で人が運んでいますが、インドネシア・フィリピンでは暑くて毛布は使わないので、バナックというゴザや、インドネシアでは巻きスカートと竹で担架をつくったりしています。これはPTAのお父さんがつくってくれました。日本は新聞紙で食器をつくりますが、インドネシア、フィリピン、タイはバナナの葉っぱで…とローカライズされていきます。

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

「防災カードシャッフルゲーム」も僕らが考えたカードゲームのプログラムのひとつです。カードに番号を振らずに、ばらばらに並べた4枚の手順カードを正しい順番に並べ替えさせるといだけのゲームですが、タイバージョンが最初のローカライズの始まりでした。最初はどうしても寄藤さんにデザインしてほしいというので、日本とタイのコラボで洪水をテーマにしたシャッフルゲームが誕生しましたが、次のときにはもう完全なタイバージョンになって、タイのデザイナーがつくるようになり、今度はフィリピンバージョンができ、最近は行くたびにご当地バージョンというものが生まれていて、ローカライズ・ワークショップがメインのプログラムになりつつあります。ローカライズすると簡単につくれることと、子どもの学びの度合いが大きいですね。

ローカライズの究極版・完成版としては、シンボル・キャラクターが変わるということですね。たとえばトルコでは「カエル」は「クマ」になりました。インドネシアは「子鹿」になっています。IKCインドネシアチームというのがあって、彼らはIKCトレーニングセンターというのを運営しています。これは日本で僕らも持っていません。彼らはほかの都市へどんどん教えに行き、政府からも発注を受けるところまでいっています。学校の先生たちが有志でやっていたのですが、学校を辞めざるを得なくなってきたり、もうこれに専念するような状況になってきています。

## 6. デザインと現場の重要性～防災意識を根付かせるために

### 永田

最近多くなってきた例として、フィリピンやネパールでは、プログラムの作り方を教えに行くという支援が行われています。カエル・キャラバンだけを実施する支援のスタイルも最初の頃にやっていたのですが、根付かないのでやめました。行く以上は、時間がかかりますが、1週間ぐらいかけて座学から始めて、いままで僕らがつくったプログラムを全部教える体制をつくります。現地の大学生や大学教員が遊んでみながらまずやってみて、そのあとにつくるプロセスを教えます。

いま、強力なパートナーとしてタイにとっても優秀なゲームデザイナー・ラティゴーンさんがいます。カードゲーム、ボードゲームは僕もつくることができますが、彼女のノウハウがすばらしい。ボキャブラリーも多く、彼女を連れていくと、できるものの完成度があがります。ほかにもフィリピンの有名なデザイン事務所が参加してキャラクター・デザインしてくれ、キャラクターグッズやゲームも彼らがデザインを仕上げられています。

これらのプログラムが昨年マニラに渡りました。マニラにある「子どもミュージアム」がやりたいと言ってきたのですが、このプログラムを開発した場所とまた別の場所なので、マニラ版プログラムにさらに改変したほうがよいということで、次はまたその支援に行きます。そんな形で根付くまでの支援を一所懸命やっています。

先日はネパールに行きましたが、学校の先生たちは防災以外も含めて教材づくりに関するノウハウがまったくありません。自分たちで教材をつくるという習慣がないので、先日の地震では悲劇がたくさん起こりました。4月25日の地震の前に、ネパールで地元のある団体が防災教育を始めていましたが、「地震が来たら机の下にもぐれ」とだけ教えていたんですね。地震が起こったのは土曜日の昼間で学校は休みで、子どもたちは広場で遊んでいました。地震が来たとき、机の下にもぐらないといけないと思って家の中に戻ったために、崩れた家の下敷きになって亡くなった子どもがたくさんいました。防災教育を間違ってしまうと、命を奪うことにもなると実感した例です。こうしたことをインタビューで事前に聞いたり、日用品も日本とは異なるので、そのようなこともリサーチしたうえで、ワークショップを行いました。

ネパールでは、子どもたちは地震のメカニズムも知らないで、神戸の体操アーティストの木須久貴さんが考案した「神戸防災体操」をベースに地震のメカニズムを教える新たな体操をネパールの先生たちが考えて加えました。学校の先生たちに対しては、ワークショップ終了後、何か新しいプログラムをつくるように宿題を出しています。新しいものをつくって学校で実践し、レポートしてもらおう予定です。ただ、これだけでは根付かないので、3年ぐらいのスパンで

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

支援に入ろうと考えています。

つまり防災教育で重要なのは、国際協力の世界でよく喩えられる、「魚を渡すことではなく、魚の捕り方を教えること」だと思っています。

## 7. 藤浩志さんの存在

### 大澤

大変興味深い活動を、長年にわたって広範囲かつグローバルに展開されていることがわかりになったと思います。永田さんのお話のなかでたびたび「藤さん、藤さん」と出てきましたが、じつは藤さんとわたしはご近所さんです。自身の紹介も兼ねてご説明すると、いま福岡県糸島市という福岡市に隣接する市に住んでいます。在籍はニッセイ基礎研究所という東京のシンクタンクですが、自分のワークスタイル、ライフスタイルを変えようと思って福岡県糸島市に移住しました。その糸島市は藤さんのご自宅があります。

藤さんは、いま秋田公立美術大学という大学の教授をなさっていて、専門は立体造形とありますが、現代美術の分野の新しい表現のスタイルでの作品制作や、アートプロジェクトと言われる活動をされています。カエル・キャラバン of 防災プログラムのなかで紹介された「かえっこバザール」というプログラムは、使われなくなったオモチャの交換の仕組みです。余っているオモチャを子どもたちが持ち寄ってワークショップに参加することでポイントを貯め、より自分が欲しいオモチャと交換する。この仕組みを考えたのが藤浩志さんで、このプログラム自体をある種の作品として残しました。

ワークショップに参加してポイントを貯めると言いましたが、ワークショップの部分には何を入れても良く、そこに永田さんのアイデアが加わり、消火器を使って的に当てるゲームやカードゲームで楽しみながら防災を学ぶということが可能になったんですね。

## 8. 消防団としてのわたし～消防組織法と消防操法

### 大澤

そんな藤さんの近所に住みつつ、福岡の糸島で私は消防団に属しています。私の自己紹介は消防団中心にさせていただきます。糸島市貴山分団の入団1年目です。

じつは消防団というのは、消防組織法に基づいた消防機関なのです。市町村における非常勤の特別職地方公務員というのをご存知でしたか。僕は、入ってから知りました。一応、辞令書ももらいました。つまり、私の肩書は、あまり書かないですが、実は特別職地方公務員でもあるわけです。

消防操法というものがあります。日本の消防訓練における器具の使いかたや動作を定めているものです。総務省消防庁の定める基準というのがあって、マニュアル的なものを本当にピッタリと定めています。消防組織法という法律があって、その法律の下に消防操法の基準というものを定めているんですね。消防組織法は昭和22年に定められ、改訂はあるものの、いまも有効です。消防操法大会というのが全国各地で開催され、消防団員は毎年7月に1か月ぐらいこの訓練があります。

消防操法の目的については法律のような文章で書かれています。

「この基準は、消防吏員及び消防団員の訓練における消防用機械器具の取扱い及び操作の基本を定め、もつて火災防ぎよの万全を期することを目的とする。」

小型ポンプ操法の定義というものを見てみましょう。消防団員がどの位置に立って、指令者はどこの位置に立って、

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

どんな手順で点呼を行うか。集合をどうやって行うか。点呼はどうやって行うか。開始報告をどうやって行うかというのが書かれています。よく読むと芝居の台本のように面白いですよ。

ホースを伸ばす作業を延々と訓練でやりますが、僕は新人団員なので、伸びたホースを巻き直すことを1か月ずっとやり続けました。同じ防災でも、カエル・キャラバンでやっていることと消防団でやっていることがまったく違うことがわかると思います。

## 9. 常識を超えたところで課題を解決するアートの力

### 大澤

永田さんのお話のなかで、日本では防災教育が文化そのものではないかという点が印象的でした。以前永田さんにヒアリングさせていただいたときに、鯰絵（なまずえ）について教えていただきました。これは江戸時代の浮世絵ですが、安政の大地震のあとにすごく流行ったという絵です。

### 永田

地震の象徴として、鯰が暴れると地震が起きるといふ伝説がかつて日本にはありました。地震が起こると困るからみんな鯰を懲らしめている絵です。江戸時代からこのように絵を使って大地震のことを伝えようとしたり、かわら版を使って広めたりアーカイブするというのは、日本特有の文化ではないかという気がします。鯰絵は本当にたくさんありますが、よく大工さんが出てきます。大工さんは地震が起こると儲かるので、大工さんが悪だくみしているような絵図や、彼らが鯰を助けに来ようとしているという、皮肉や風刺もこめた描かれ方をされているものもあります。

### 大澤

包丁や棒を持って鯰を叩いている人もいれば、なぜか女性が三味線で叩いていたりと、滑稽だけれども、地震はなぜ起こるのかということ、江戸時代なりの習俗的な考え方で示していますよね。科学的ではないにしても、こういうことが起き得るのだということを伝えているのだと思います。250点ほどの種類が確認されているようですが、鯰絵は身を守る護符として、あるいは不安を取り除くためのまじないとして、庶民のあいだに急速に広まり、流行が終息するまでのおよそ2か月間に多数の作品がつくられたとwikipediaにも書いてありますね。

単に防災と文化というくりではない、日本人にそもそも備わっている知恵のようなものを感じます。

## 10. 自然・災害と向き合う

### 大澤

永田さんの仕事はいつも「防災×アート」というように言われています。永田さんは「特にアートをやっているわけではないけれども」とおっしゃいましたが、ご自身はアートをやっているつもりではないわけですね。

### 永田

アート自身の定義は難しいと思いますが、アーティスティックなことをしている感覚はあります。ただ、アートそのものをやっているかと言われると、自分自身にその意識はないですね。よく藤さんが「アートは超常識」と言いますが、あの言葉が大好きです。非常識ではなく、常識を超えるのがアートだと。アートの持つ役割についてはさまざまなとらえ方があると思いますが、社会課題に取り組んでいる立場からすると、既成概念に凝り固まったものや、「こうで

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

なければいけない」というしきたりなどから一歩踏み出したり、打破するときに、藤さんの言う「超常識としてのアート」という考え方は非常に重要で、アーティスティックなことだと感じています。

#### 大澤

常識に囚われない、常識を超えたところで課題を解決する取り組みというのは、僕もすごく共感します。

もう1つの切り口ですが、先日、茨城県で水害が起き、東日本大震災のときにも大きな津波がありました。何か大きな災害が起こって次に備えるとき、より頑丈な堤防をつくるとか、もっと高い防潮堤をつくるとか、地盤を何メートル嵩上げしようとか、そういう形での防災が果たして正しいのでしょうか。江戸時代は果たしてそうだったのだろうか、という疑問があります。これからの時代に災害と向き合う姿勢について、どうお考えですか。

#### 永田

これもなかなか難しいところで、一概にダメだとも言えないし、できる対策はしたほうがよいけれども、だいたい災害の方が超えてしまいます。このあいだの川の堤防の決壊も30年前と現在で雨量を比較すると、圧倒的にいまのほうが多いわけです。堤防にしても25～30年前の基準でつくられていて、そのときに常識だったものは非常識になってしまっている。もう歯が立たないわけです。

そうなると、もちろん、さらに大きな堤防をつくらないといけないのでしょうけれど、少し発想を変えないと防ぐことはできません。来たときの対処だけではなく、雨そのものを減らすような、環境を見据えたことをみんなでやらないといけないのではないかと、こういう視点に立たないと、根本的には何も変わらないという気はします。

もちろん一概には言えませんが、どこかで、人が一番で自然を押さえ込む、というような考え方で自然をとらえたような災害対策というのは、基本的には通用しないのではないかと思います。

#### 大澤

とても大きなテーマになるかもしれませんが、自然は克服するものや押さえ込むもの、という考えが文明や文化の根底にあったのかもしれませんが。カルチャーやカルティベート、つまり「耕す」という語源の「文化」という言葉を、自然に対峙するものとしてとらえてきました。でも、日本古来の芸能が、土地の神様を鎮めたり亡くなった方の魂を弔ったりする役割には、自然と対峙するというよりは自然とともに生きる姿勢を感じます。

#### 永田

寄り添う、ともに生きる、という姿勢ですね。

僕らがやっている「地震 ITSUMO」という活動も「もしも起こったらどうしよう」ではなくて、「いつも起こるのだからちゃんと付き合いおう」という考えがベースにあります。地震のメカニズムを知って、対処の仕方も知る。人との付き合い方と同じだと思います。相手のことをちゃんと知らなければ付き合えない、そういう感覚にならないと、あまりにも無知過ぎますよね。自分が住んでいる地域のハザードマップを見ていないとか、自分の住んでいる土地が昔はどういう場所だったのか、そういう歴史も相当忘れ去られているというか、分断されていますよね。

3.11のあとに藤さんとも議論をしましたが、地域の歴史というものがかなりぞんざいに扱われているのではないかと。ちゃんと付き合い合っていない。災害とは誰も付き合いたくないと思いますが、付き合いざるを得ないのでちゃんと知ったほうがよいし、付き合い方を学んだほうがよい。僕らのプログラムはそうに行っているつもりです。付き合い合う接点をつくるのがカエル・キャラバンです。マニュアルも、どうすれば手に取ってもらい、かばんに入れてもらえるか、身近になってもらえるか、そういうことを一所懸命考えています。

#### 大澤

災害と付き合いということと、普段から地域のことを知っているかどうかは関連していると思います。この土地は水

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

害が起きたときにいち早く浸水する地域だということ、古くから住んでいる人は知っていても、新しく来た人は全然知らない。あるいは、あの家はおばあちゃんの独り暮らしだから、まず見についてあげなければという付き合いがコミュニティのなかであるかどうか。カエル・キャラバンの活動を見ていても、こういうことが大事なのではないかと思えますね。

#### 永田

「挨拶も防災でした」という被災者の名言がありますが、災害が起ると、そういうことに気づかされます。何もかも便利になって仲良くなっても暮らせるから忘れがちですが、普段から仲良く暮らすことの意味というのも、災害が起こったときに気づかされるわけです。災害が起こるとみんなの意識が高まって、そのときにしか興味を持ってくれない人がいるので、一所懸命伝えようとがんばりますが、時間が経つにつれて、元に戻って忘れてしまうのは、なぜかなとも思います。人間の真理かもしれませんが…。

特に都市で暮らす人は依存型の人ばかりなので、誰かが助けてくれる、何とかなると思っている。そういうことではなくて、人を助けられる人、自分で立ってられる人をどれだけつくれるか、にかかっています。最近「人づくり」と言っていますが、それに尽きると思います。人づくりをするうえでは、超常識的な発想で場をつくらない限り、災害や地震というのは遠いんですね。気になってはいるけれども、ちょっと置いておこうかという感覚になってしまうので、そこにアートの力的なものが必要な気はします。

## 11. 新たな社会創造のために

#### 大澤

ここで、企業メセナ協議会の取組についても紹介したいと思います。

企業メセナ協議会は東日本大震災が起きた直後の2011年3月23日に「東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド（GBFund）」を設立しました。メッセージはWebサイトで読んでほしいのですが、僕は2009年3月に出された「社会創造のための緊急提言ニュー・コンパクト」に、すごく感銘を受けました。

<以下、引用>

「社会的危機を乗り越え、日本を再生するには、バーチャルで巨大な社会像から脱却し、リアルで等身大の持続する社会をつくり出す必要があります。そうした社会創造のために、いまこそ文化への集中投資が急務だと考えます。文化は、社会を形成する人々の知恵の総体であり、社会創造のための新たなソフトを生み出す力の源泉だからです」

企業メセナ協議会『社会創造のための緊急提言「ニュー・コンパクト」

～文化振興による地域コミュニティ再生策～』（2009年3月16日）

<http://www.seikatubunka.metro.tokyo.jp/bunka/hyougikai/6kai/210610siryou3.pdf>

<以上、引用>

震災の2年前にこのようなメッセージを出し、いち早くGBFundというものを立ち上げた企業メセナ協議会さんをリスペクトするのですが、ファンドの目標額が1億円だと聞いたときに、いくら何でも高すぎるのではないかと思っていました。が、軽々とそれを超え、途中で目標を2億円に上げました。今年7月時点で1億4,000万の寄付総額があり、助成活動件数は239件となります。



## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

2009年当時の社会的な危機というのは、リーマン・ショックやバブル経済崩壊などだったかもしれませんが、その後東日本大震災や福島での原発事故があって、向き合うべき社会的危機が訪れたときに、文化の力というものを信用しないといけないのではないかと思います。

## 12. 無力さを忘れず、寄り添いながらすすむ

### 大澤

東日本大震災が起きたときに「文化やアートで何ができるのか、なんと無力なのだろう」と考えた人も大勢いたし、僕自身もそうでした。しかし、実際に GBFund の採択活動を見てもいろいろな活動が起きています。この結果から見ても、やはり文化にできることはたくさんあると今は思っています。阪神淡路大震災を見ていらっしゃる永田さんも思うところがあると思いますが、いかがですか。

### 永田

文化やデザインで何ができるか、本当に向き合うと無力です。僕も、いまでも無力だと思っています。ただ、無力さを理解したうえで一步踏み出せる人が、本当のインパクトを与えられるんじゃないかと思います。アース・マニュアルプロジェクトという世界各地の優れた災害関連分野のクリエイティブな活動を集めた展覧会のときのリサーチでは、「俺のデザインで（被災地に対して）何かやってやるぞ」という姿勢のプロジェクトはあまり続いていなかったり、地元で浮いてしまったり、うまくいっていないものがたくさん見受けられました。スタンドプレーの活動も、正直たくさんありました。やはり謙虚さというか、寄り添い方がしっかりしている活動は継続し、根付き、受け継がれているのだと思います。そういう意味で、姿勢や態度というのが一番大事だと思っています。そして、無力さを理解したうえで、諦めずに一步踏み出せるかどうかが重要だと思います。

### 大澤

「災害とアート」というテーマで考えたとき、「アートに何ができるのだろう、何もできないのではないか」という無力感を感じたことを、いまでもどこかに持っていたほうがよいのではないかと思いますね。

### 永田

そうですね。若者たちに震災とのかかわり方を話す機会があれば、僕自身は阪神・淡路大震災の直後には何もできず無力感でずっと辛い思いをしていたこと、発生から10年目にカエル・キャラバン開発の機会に巡り合い、自分の番がきた、がんばろうと思ったこと、10年後にできるかかわり方もあることなどを話しています。

大きな災害になるほど、自分ができるとかたかが知れているけれども、何かしらできることがあると思っています。それがどうしたことなのか、どれぐらいのボリュームなのか、いつそういう番が来るかもわからないけれども、災害や被災地に対して思い続けることが重要で、忘れないことが大切だと思います。

## 13. 記憶や経験をのこし、伝えていくこと

### 大澤

教訓を学んだり残していくことの課題として、悲しく辛い記憶は残しにくいということもあると思います。

## ミニ・メセナフォーラム レポート全文

### 「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

#### 永田

楽しみながらやれる体験もありますが、悲しい体験ももちろんもあります。実は1回大失敗したことがありました。学校の授業に防災の知識を学ぶボードゲームを持って行って子どもたちに遊ばせて、それ自体は大成功したのですが、最後に15分ほど時間が余ったので、先生がよかれと思って子どもが震災で亡くなる悲しいストーリーの絵本を読み聞かせしたんです。子どもからすると、ゲームで楽しく盛り上がった直後にドーンと悲しい状況に落とされたわけです。その授業のあとの子どもの感想が「ゲームで笑っていたことを後悔しました」と。「ゲラゲラ笑ったりして、すごく悪かった」と泣き出す子もいました。そうなると先生方は「このゲームは使えない」となってしまうのです。授業の組み立て方や学ぶ場のづくり方は細心の注意を払って構成しなければなりません。本当に災害時の心の中を学ばせたいのなら、その時間をしっかりとる必要があります。防災を伝えていくというのは、伝え方を間違えるとマイナス効果が起こり得るものです。場のづくり方や子どもたちのケアをきちんとしないと、とんでもないことになるということを伝えることはとても大事だと思っています。

#### 大澤

風化させてはならない経験というのはあると思いますが、決して、悲しい、辛いことだけを残すわけではなく、時間が経てば、技術を伝えるために楽しみながら学ぶなど、方法を変えていくこともありではないか。そうすることで、向き合いにくいものと向きあう。辛いものは、やはり辛いものとして向き合わなければいけないけれども、向き合わないまま遠ざけてしまうと忘れられてしまうということがあると思います。

#### 永田

阪神・淡路大震災でお子さんを亡くされた、私がよく存じている語り部の方がいらっしゃるのですが、最近講演に行った際に、話を聞いていた子どもたちが面と向かって「先生の話、ちょっと重くてうざいわ」と平気で言ったそうで、とても辛かったとおっしゃっていました。僕らの技や知識は、いかようにもなるけれども、語り部さんのお話はしっかり聞いて心に留めておくべきで、とても大事なことなのに、なぜそのような反応になってきたのか理解に苦しみます。そんなことを言う子どもたちを一喝すべきだと思う一方で、たとえばアニメーションにするなど、違う手法で伝えていくこともできるかもしれません。「伝える」と「伝わる」はやはり違いますから、伝え方をこれからも考えていく必要がありますが、やはり難しいことです。

#### 大澤

残念ながら時間となりました。本日のミニ・メセナフォーラムは「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」ということで、永田さんと私でお話をさせていただきました。ありがとうございました。

#### 永田

ありがとうございました。

\*\*\*\*\*

#### 【開催概要】

ミニ・メセナフォーラム「災害とアート～防災の観点から災害復興におけるアートの可能性を探る」

- 日時：2015年9月17日（木）16:00～17:00
- 会場：公益社団法人企業メセナ協議会 事務局（東京都港区芝5-3-2 アイセ芝ビル8階）
- 主催：公益社団法人企業メセナ協議会
- 協力：ネットTAM